

---

# アゲイン～あの日をもう一度～

洞爺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アゲイン〜あの日をもう一度〜

### 【Nコード】

N2668R

### 【作者名】

洞爺

### 【あらすじ】

とある理由で大好きだった卓球を諦めた主人公白木一茶。しかし一茶は、卓球を諦めきれずに一からスタートする、仲間と共に。そうあの日のリベンジを遂げるために……

## 第一球 S t a r t o f c h a p t e r (前書き)

どうも、洞爺と申します。

このサイトで初めて小説を投稿させていただきました。読者様に楽しんでいただけたら嬉しいです。

## 第一球 Start of chapter

ある映画に触発され俺は小三の時に卓球を始めた。

俺は卓球の楽しさを知りどんと卓球にハマっていった。

ボールを返すのが楽しい、点を取ったときに嬉しい。スマッシュを決めたら楽しい。それだけだった、それだけで俺は卓球を続けていた。そんな俺には結果がついてきた、ホープスの部での優勝。

それが、もう言葉に出来ないほど嬉しくて俺は益々卓球にハマった。それが小5の時。

もう、その時は卓球が楽しくて、楽しくて仕方がなかった、スマッシュ、レシーブもう卓球の全てが。皆が辛いと言う練習さえ楽しく感じれるようになった。休日だろうが平日だろうが俺は卓球の練習をした。

練習だけじゃなく筋トレもこなした。全て卓球を楽しむだけのために。

だけど俺はある出来事を境に……卓球を辞めた。

そう、あの日を境に……

\*\*\*

「えー、であるからして」

うつわ、校長の話長え。聞くの面倒だな……寝るか？ 立ったまま寝るか？ とか思っけど入学式、早々はマズイだろうから我慢しよう。

にしても退屈だなコンチクショウ。退屈すぎるとグレちゃうよ？

俺グレちゃうよ？

……俺の言葉が通じるはずもなく校長の話は長々と続く。俺はふと思う、校長のこの長ったらしい話に心を動かされる奴はいるのだろうか、関心するやつはいるのだろうか。俺は正直居ない、と思う。

居ないなら……なんで校長ってこんな頑張って話してんだろうなあ。誰からも求められてもないのに、関心を得てないのに頑張ってるって、すげえよ校長。俺は挫けちまったのによお、頑張ることを。

そついうこと尊敬してやんぜ校長。

と、こんな偉そうなことを考えていると校長の話が終わり各クラスの担任紹介が始まった、始業式じゃねえから一年だけだけど。どうでもいいかなーと思ひスルーしようとかボーとしていたら俺の組ぐみの担任が舞台上に立っていた、見た目は結構ぼっちゃりとして穏やかそうだな。髪は白髪でワックスとかを使ってるわけではなさそうなのに綺麗に七三分けになっている。

「えー、ご紹介にあずかった崎本賢治さきもとけんじです。どうぞ、よろしく」

それだけかいっ！

崎本先生はそれだけ言うって舞台から下りさっきまで居た位置へと戻っていった。

なんか……ゆるそうな先生だな、あの人なら校則違反とか許してくれるかもしれない、よし今度試してみよう。あ、そろそろ入学式終わりそうだな。

と思つたら教頭がマイクの前に立ち

「これにて兜皇学園中等部の入学式を終了します」

と言った。おー、やっと終わった終わった。教師がなんかゴチャゴチャ言ってるけどなんにも聞こえましえーん。さ、とつとと教室戻りますかね。

ぞろぞろと体育館の扉から人が出て行く光景……気持ち悪いーな。

まっ、俺もその一員なんだけどさ。

俺は体育館から出ると手を空に向けのびをした。んーっ、気持ち良いねえ堅っ苦しいことの後のコレは。のびに加え少し暖かい風がゆるりと吹いてるからもつと気持ちいい。

あれ？ 誰かが近付いてくるぜよ……あの感じ二年か三年の先輩だな、今日は入学式。つまり一部の三年しか参加してないから三年の先輩だな。

「ちよつといいかな？」

うわっ、話かけられた。先輩がなんの用だよコンチクショウ、俺は人見知りなんだよ緊張しいんだよ。

「はい、大丈夫ですけどなんか用っすか？」

俺は敬語とかけ離れているような気がする言葉で返した…敬語とか使えねえ！

それにしても本当に何の用だろうか……目えつけられることした覚えねえぞ。

「白木一茶君だよな？ あ、間違ってたらごめんね。」

「そうですけど」

「僕ね卓球部の三年なんだけど卓球部入らない？」

は？ まさか…知ってんのか？ コイツ、俺が昔卓球やってたこと。まあ、一時期この辺じや有名になってたけどさ…「期待の新人 まさに天才」的な感じで。……卓球、か。もう、やる気ないのよね俺、面倒だし。楽しいのは楽しいけど、あんな思いするの嫌だし。初対面の先輩にこんなこと言えないからやんわり断るかねえ。

「すいません、俺もう卓球をやるつもりないんすよ」

そう答えて俺は教室に向い歩いていった、だけど俺は途中で立ち止まる。

目の前に桜の木があるからだ。

体育館の前ある庭には季節感が出てるなーと思える桜が咲いている、俺はこの『私立 兜皇学園』に受験に来た時にこの桜に一目惚れした。別に花なんて咲いていやしない、まだ蕾がぼつぼつとついているだけだった。だけど俺はこの桜に魅かれた、なんか桜っていいよなあ。風がぴゅーっと吹いて空に花びらが舞うのも切ないけどすっげー綺麗だし、うん。

ああ、そろそろ行かないと今日は大したことしないんだろうけど遅れちまう。

残念。もつと見ていたかったぜ……ま、今度からいつでも見れるか。俺は今度こそ教室に行くために小走りで教室に向った。

「お、一茶じゃん」

「おお」

俺が教室に行くと友達の久原千秋くはらちあきが椅子に座っていた。

千秋とは腐れ縁みたいなもんだ、小さい時からの付き合いで同じ卓球クラブにも入っていた、勿論小学校も同じ。でも、俺が小5の時引越したはずんだけど……

「こっち戻ってきてたのか」

「ああ、親がまた転勤することになってな。どうせならスポーツの名門校に入ってやろう と思って受験した。卓球は微妙らしいけど…… ころ」

「まだ卓球続けてんのかよ」

驚いた、俺に誘われて無理矢理入らされたのにまだ続けていたとは正直、引越すると辞めるだろうと思ってたし。こんなところに入っただけは結構良い線行っただけか。卓球には興味ないけど若干、気になるわ。

「あたばうよ、面白れーじゃん卓球。お前もやんだろ？ 今度一緒に入部届け出しに行こ うぜ」

「パス、俺やらねーし。さっき先輩からスカウト来たけど」

俺は少し笑いながら言った。自分で言ったんだけど、何故か笑えるぜ……スカウトで。

「マジで！？ あんだけ好きだったのにな、卓球。まあ、本人がやる気ないんだっ たら仕方ないか」

「悪いな」

俺はそう言い、適当な席に座った。入学式なので、座る席はどこでも良いらしい。正式な席は後日決めるそうだ。……黒板にそれ以外書くことなかったのかよ。

む、隣に誰か座ってきたぞ。よくこんな顔が怖いって言われるやつ隣の隣に座れるな、認めてないけど。誰が強面じゃい！ 俺の隣に座ってた奴はおとなしそうで穏やかなやつだった、顔すんげえ整ってるし……小さめだし……こういうのが女子にモテるんだろうなあ。

「あ、あの…よろしくね」

隣に座っている笹村（名札に書いてあった）が急に話しかけてきた。俺は少し吃驚しながらも「ああ、よろしく」とだけ返事をした。

なんか、男の俺から見ても可愛いとか思えちゃうなこいつ。癒し系のオーラ出てるよ、オーラが出ちゃってるよ。こっぴつ奴が母性本能ってやつをくすぐるんですな。にしても、なんで俺の隣に座ったのかねえ他にも席空いてるとこあるし馴染みやすそうな奴なんて一杯いるだろうに…

「えつと僕、笹村樹って言うんだ」

うおう、急だな。なんだこいつ、急に話すの大好きなのか？ 自己紹介されたってことは俺もした方がいいのか。

「俺は白木一茶。変な名前だけど気にすんな」

一茶って名前はよく変って言われる、母ちゃんが小林一茶？ が好きでつけたらしい。

まあ、そんなことはどうでもいいけど。

「そ、そんな！ 変じゃないよ全然」

「そうか？」

「うん！」

「ははっ、ありがとうな笹村」

こいつ面白いな、喋ってみると。キョドってるところが笑えるというかなんというか、とにかく面白い。

「俺と友達になろうぜ、笹村」

俺が急に言う。…うつちゃったちよ、『急に何かしらを言っちゃう症候群』 んなもんじゃないけど。

なんか…思っちゃったのよねえ、こいつと友達になりたいって仲良く出来そうだし、こいつとなら。

「え。僕でいいの？」

「ああ、俺でいいなら」

「じゃあ、よろしくね！ 一茶君！」

俺は一茶君と呼ばれキョトンとした。一茶君なんて初めて言われた

わ…ずっと白木君が一茶だったし、なんか不思議な感じじゃ。でも新鮮で良いねえ、さすが入学式だな面白いことがわんさかあるぜ。この後、笹村と色んなことについて喋ってた、喋って分かったけど意外と気が合うみたいだ。好きなゲームジャンルも同じだし話が合う。良い友達にめぐりあえたぜ。俺と笹村が喋っていると先生が入ってきた、それに吃驚した俺達は結構な大声で喋ってたため、急いで前を向いた。

…いきなり入ってくんなよな、先生。

その後、先生が話をし配るものだけ配って今日の授業？ は終了した。

「一茶、一緒に帰ろうぜ」

「うい」

俺が教室から出ようとすると千秋が話かけてきた。

返事はしたものの…家、近いのか？ まあ途中で道変えたら良いんだけどさ。

なんか、ありきたりで良いねえ「じゃあ、俺こっちだから」みたいなやつが、ぼっちってわけじゃないけど下校なんて今まで一人でしてたからちと嬉しいわ。

この後、笹村も一緒に帰ることになり俺の下校は始めて楽しいものとなった。

\*\*\*

「母ちゃん、ただいま」

「なんだい、早かったじゃないか」

「今日は入学式だったろ、てか入学式くらい来いよな」

「うっさいねえ、あんたは。私は忙しいんだよ！」

忙しいって……思いつ切り寝転びながら煎餅食ってんじゃねえか、だから太んだよかった。俺の母ちゃんは太ってる、そしてパーマをかけている、そして常にエプロンをしている、なんか昭和かつ！

つてツツコミたくなる母ちゃんだ。

「ああ、そうだ一茶」

母ちゃんは起き上がりキリつとした真剣な顔で俺を見る。  
なんか…元から怖い母ちゃんにこんな顔されると、怖い。

あつ、俺の顔が怖いのは母ちゃんの遺伝か。

「誰が強面だ。私が二枚目に産んでやったんだ、顔が怖いなんて思  
うんじゃないよ」

うおう、聞こえてたのかよ、思うなって言われるんだから仕方ねえ  
だろうが。

それにしても母ちゃんがこんな真面目な顔すんの珍しいな、なんか  
あったのか？ 離婚したとか。さすがにそれはないか……

「あんだ、卓球はするのかい？」

また、それかよ。今日で三回目だつーの、なんでやらないって決  
まってることに答えなにやらん。

面倒くせーな…傷をえぐるんだつての、そういうのは。

俺は床に置いた鞆を取りリビングのドアを開けた。

「しねえーよ、卓球なんか。面白くねえし、飽きた」

俺はそう言つと階段を上つてゆき自分の部屋に入り、ベットにダイ  
ブする。

そうだよ卓球なんか……卓球なんかもうしないって、あの日決めた  
んだ。もう、あんな悲しい思いはしない様につてもうあんなに泣か  
ないようにつて決めたんだ……ヤベ、泣けてきたぜコンチクショウ  
…チクショウ。

俺は仰向けになり涙を手で拭い、目に腕をあてた。すると、当たり  
前だけど目を開けていても光は一切遮断される、俺はそれが心地よ  
くゆっくりと目をつむった。

## 第二球 桜の木の下で

”カコーン カコーン”

体育館にピン球の跳ねる音が鳴り響いていた。入学式後、始業式があり始業式から一週間くらいが経っていた。俺は卓球をやるつもりは一切ない、だが俺は体育館に連れてこられていた……。　　まったく、面倒くせえなあのアホ共が。仮入部だか何だか知らないけど二人で行けっつーの。あー、もう帰って良いかな。勝手に帰って良いかな。笹村は千秋にそそのかされ卓球部に入るとか言いだし、また一人で登下校かよ、寂しいぜコンチクショウ。まあ、時間を気にせず桜を見れるって点では良いけどな！　あれ、なんでだろう目から汗が……。出てきたぞ？　な、涙じゃねえし汗だし心の汗だし。

「あ、一茶君。入る気になつてくれた？」

「いや、あいつ等の付き添いで来ただけです」

入るわけねえだろうがボケ。先輩だから言えないけど同級生だったらぶん殴ってるぞ、しつこ過ぎる。ってか人がしんみりしてる時に話かけてきてんじゃねえよ、ボケ。普通、先輩に向ってボケを二回も言うことなんて滅多にないぞボケ。

「ん？　二回じゃなくて三回じゃないのかな？」

「ああ、そうすね」

って、心の声を読むんじゃねえよ！　まったく、安心して考えことすら出来ねえぜ。ってか、この先輩意外と怖え……。目が笑ってねえよ、腹黒いオーラ出てるよ、出ちゃってるよ。俺の周りにはオーラ出てる奴が沢山、いんぜ。俺は一つのオーラも出てないけど。

ありや、腹黒オーラ消えてる。どったのかな？　……。ああ、集合か。先輩達がすげえ集まつてるや。それにしても少ないねえ、新入部員。まだ仮入部の段階だけど千秋と笹村しかないじゃん。千秋が微妙って言ってたけど本当そうなんだな。先輩の人数は……。二年が二人、三年が四人、か。おいおい、いくらなんでも少なすぎるだろう。団

体どうやってたんだよ……補欠いねえじゃねえか、これが微妙な理由の一つか。練習見てみたけど、あれはさすが『名門』って感じだな。基本フリーだけど個人、個人が自分にあつた練習をしているし、協力しあってる。この感じだとシングルスは強いんだろうけどダブルスはダメダメだな、こりゃ。推測だけどダブルスは二年の二人だ。あの二人、基本がなっていない。只、デタラメに卓球をしているだけだ。ダブルスは個々の力が強ければ強い程に強くなれる。まあ、パートナーとかの絆でもっと上手くなれるらしいけども。

あの人は、個々の力が十点中、五点って感じだ。これじゃ合わせても10にしかない。……これで、どうしてきたのだろうか。あの人は。ダブルスを落としてもシングルスに4人いるけどこれじゃキツいだろうなメンバー交換出来ないし。まあ、笹村と千秋が入ったから大丈夫だろ。千秋がどの程度までレベルアップしてるか知らねえけどな。……って何考えてんだ俺、どうでもいいことなのに。あ、もう皆練習再開してら。千秋達に帰っていいかどうか聞か。

「千秋ー！　ちと、来てくれる」

俺がそう言つと千秋は小走りで来てくれた。中断させられて不満そうな顔してるけど……

「もう、帰っていいか？　暇だし」

「別にいいけど……本当にやらないのか？　あんだけ好きだったのに」

俺は「ああ」とだけ呟き体育館を出て行つた。しっかし笹村楽しそうだったに、あれなら勝つことに執着せずに楽しめそうだな、卓球を。まだまだだったけどこれから成長するだろう、アイツは。

んーっと、桜でも見たあと帰るかな。学校いても暇だし一人だし体育館を出て少し歩くと桜を見上げボーっとしている少女が居た。

誰だ？　こいつ俺と同じ桜大好きっ子か？　俺と同じ寂しい奴も居るんだな、とニヤけながら俺は桜の木の近くにあるベンチに座つた。生暖かい春の風が吹き花びらが舞う。いつもなら鬱陶しい風も何故

か今なら心地いい。少しツンとする花の匂いが心を癒してくれる。  
俺は鞆からお茶を取り出すと少しだけ飲んだ、そして濡れた口を服の袖で拭う。

「あの、良かったらお茶少しだけくれませんか？ 忘れちゃって…」

俺の前に立っていた少女は優しく微笑む、と同時に少し申し訳そうな顔をした。

くれて…俺の飲みかけだぞ？ 知らない奴に、しかも男子に聞くのかよ。俺はどうでもいいけどさ、うん。なんか、こっちが申し訳なくなるぞよ。まあ、少女（同年だけでも）欲しがっているんだ  
上げないわけにはいかないだろう。

俺はポイっとペットボトルを投げる。すると少女は慌ててペットボトルを手に取った。

彼女はフタを取ると仕事終わりのサラリーマンがビールを飲む様に勢い良くお茶を飲んだ。うおう、飲みっぷりいいねえ嬢ちゃん。

マジですげえな……よほど、喉渴いてたのか？

「ありがとうございます！」

ニッコリと微笑んだ彼女はペットボトルを差し出したが俺はそれを受け取らず「やるよ」とだけ言って、駐輪場に向った。

今の俺渋くね？ カツケくね？ マジ俺パネエ。まあ、そんなことはどうでも良いんだけど……可愛かったぞよ、あの子。もうタイプ。すんげえ、タイプ。また今度会ったら話しかけてみよーっと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2668r/>

---

アゲイン～あの日をもう一度～

2011年10月8日17時36分発行